

日本近代の室内はどう整えられたか(一)

— 田園都市、漱石の住まい、生活改善同盟会

森 仁史

日本の近代は一八五四年海外に国を開き、国際デビューを果たすことを選んで始まった。それまでアジアの片隅で中国を手本として培い形成してきた文化や生活法に西洋のそれが交錯する路に踏み出すことになる。ヨーロッパ諸国が武力によってアジア、アフリカに植民地を確保した十九世紀後半にあつては、後進国日本は真つ先にそれらに対抗できる軍事力を基盤とする近代国家としての体裁を整えることから始めねばならなかつた。武器、軍艦とその製造、操作技術の習得は不可欠になる。これに次ぐのがその経費捻出のための輸出拡大となるのは理の当然であつた。この時期たまたま欧米でジャポニスムが興隆したため、日本の工芸品の輸出はこれに貢献できたのであつた。まだ「美術」概念の受容が行き届かなかつた日本では、工芸職人は「美術」制作に励んだし、一八七九年龍池会に集つた政府高官もこれを積極的に支援した。まさにこの故に政策としての「美術」振興の優先順位は高くなつたのだつた。一八八七年の東京美術学校の設立でも輸出振興への貢献を後盾としようとしていた。ヨーロッパでは美術の一翼を担う建築教育は日本でも一八七七年と、美術に先んじているのはこれによつて政府が必要とする公的機関の設計者を育成するためだつた。官庁、

学校、病院、兵舎などが建設されたが、これらはみな西洋が培つた運営システムによつて機能していた。そこで用いられる椅子、机、ベッド、書棚などはみな近代以前の日本には存在しなかつたから、西洋の方式を模倣、移植するしかなかつた。従つて、日本の初期の建築学徒が国民のための住宅建設に目を向けるいとまはなかつた。

帝国政府による近代国家の建設事業が一巡した維新以降四〇年を経て、ようやく日本社会が目指す近代をいかようなものとして整えるかが課題として意識されることになる。それが維新後官僚となつて政権を主導した武士層によつて率先されることになるのは避けられないことであつた。一九〇七年内務省地方局有志は『田園都市』を刊行した。これに先んじて前年内務省地方局府県課長だつた井上友一(一八七一—一九一九)が『西欧自治の大観』(報徳会、明治三十九年)のなかで一九〇三年から建設が始まつていたレッチワースのガーデン・シティを「田園的都市」と訳したのが最初の紹介で、〇七年には「花園的都市」とも訳している。同省地方局嘱託だつた留岡隆助(一八六四—一九三四)がA・R・セネット『田園都市の理論と実践 Garden cities in theory and practice』(一九〇五)を入手して、井上に見せたところ紹介を勧められ、『田園都市』として編纂されたのであつた。同じ嘱託だつた生江孝之は一九〇八年の二度目の渡英でレッチワースを訪れ、ハワードにも会っているが、それは図書刊行後のことであつた。留岡は熱心なキリスト教徒で生涯にわたつて児童更生教育、家庭学校の運営に取り組んだ人物であり、井上は二宮尊徳を顕彰する彭徳会(一九〇六年設立)を熱心に支援し、全国の篤志家の督励、組織化に注力していた。思いを同じくする両者は報徳会の活動に熱心に取り組んだ。井上が東京府知事任

職中に脳溢血で急死したとき留岡は追悼文を書いている(木下順「もうひとりの井上友二」『経済学雑誌』第一一五巻第三号、二〇一五年二月)。

内務省は一九〇九年から地方改良運動を始め、地方財政の健全化、国民教化を推進しようとしていた。つまり、地方行財政と生活習俗を再編成することによって、一九〇四―五年に戦われた日露戦争に国家予算の七倍の戦費を支出し、十万人余の戦病死者を負担した国民を再び国家目的に奉仕できるよう育成しようとしていた。ハワードと内務省とが目指すところの差は両者の立論を比較すれば一目瞭然である。

…過密で不健康な都市が経済科学の最後のことばであるかのように、あるいはまた鋭い線によって工業と農業を分割する現在の産業形式が、必然的に永続するかに考えられていることが問題である。

…都市生活と農村生活の二者択一があるのではなく、じつさいは第三の選択―すなわちきわめて精力的で活動的な都市生活のあらゆる利点と、農村のすべての美しさと楽しさが完全に融合した―が存在するのである。…人間社会と自然の美しさが共に享受されるように工夫されなければならない。(E・ハワード、長素連訳『明日の田園都市』昭和四十三年)

所謂『田園都市』といふは、…同胞の互に一致戮力して、齊しく誠実勤労の美德を積み、市邑全般の繁栄を著くして、弘く人を濟い世を益せんとするに在り。…念ふに整へる自治は美しき人格を造くり、活ける自治は亦能く新たな民風を興す。…所謂『田園都市』なるものも、もとは工場の生活に付随せる特種の積弊を濟はんが爲め、とくに案出せられたるものなるが故に、直ちに採て之を我邦に移し難きや亦言を待たず。(内務省有志編『田園都市』博文館明治四十年)

社会問題の解決をイギリスでは社会環境の整備によって図ろうとしたのに対して、日本では道徳律の強化によって国家に従順な国民意識を醸成しようとしていたのだ。後進国では社会資本への投資の余裕がないので、最初からハワードの先例に倣うことは放棄して、貧しい環境には道徳心を増進させて目を塞ごうとした。

一九〇七年阪神電鉄はエッセイ集『市街居住のすすめ』を編纂し、緒言で同社専務今西林三郎は「黄塵万丈の都市に不衛生の生活を続けねばならぬ人は、実に不幸な人といはねばならぬ。…速に欧米諸国の例に倣ふて市外居住の風を盛んにし、此経済上衛生上の損害を避けねばならぬ。」と訴えている。すでに一八九四年滋賀重昂『日本風景論』一九〇一年国木田独歩『武蔵野』が公刊され、一九〇五年には日本山岳会が設立され、日本人の自らを取り巻く自然環境への眼差しは一部で先進国のものに変わりつつあった。

しかしながら、この明治末では日本人の生活形態は依然として近世の様式を脱却するものではなかった。夏目漱石を例にとると、一九〇〇―三年英国留学を経て、第一高校(年俸七百円)、東京帝大講師(年俸八百円)となったが、〇七年三月大学を辞し、朝日新聞社(月給二百円)に加え益暮れに賞与)に転職した。十月漱石は早稲田南町に転居する。夏目家は頼朝から補せられた信濃国夏目村の地頭の次男を始祖とすると伝えられ、父は牛込と高田の馬場一帯を治める名主を務めていた。喜久井町という地名は夏目家の家紋に由来し、自宅前の坂は夏目坂と名付けられている。つまり、漱石は晩年になってかつての父祖の地近くに引越したのだった。

漱石は一八八九年一月、二十二歳のときに正岡子規と知り合い、大

きな影響を受けるが、二人を結び付けたのはお互い非常な寄席好きであったためであり、漱石は子規に自らの感懐を漢詩に詠んで送っていた。あるいは自己没入できるのは南画であった。これらのことは二人が近世江戸趣味に嗜みが深かったことを物語っている。漱石は帰国直後一九〇三—〇五年東京帝大英文科で英文学概説を講じ、四十一歳で『文学論』（大倉書店）として発表する。この序において「文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり。」と思っていたが、「漢学にはゆる文学と英語にはゆる文学とは到底どう定義に下に一括し得べからざる異種類のものたるべからず。」（『漱石文芸論集』岩波文庫、一九八六年）と留学中に気づき、この解決に自己探求と膨大な読書を要することになった。ちなみに漱石は留学中一月ほど高級住宅街ハムステッド近くに下宿したことがあり、ここを「東京の小石川のようなところ」と評している。四十九歳（死の前年）になって「そう西洋人ぶらないでも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出して見たら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思って、著書その他の手段によって、それを成就するのを私の生涯の事業としようと考えた」（『漱石文芸論集』岩波文庫、一九八六年）という結論に至る。漱石は西洋を突き放すこの態度を「自己本位」と呼んでいるが、この主張は殆どポスト・コロニアル宣言に等しいように思える。前近代の意識に深くとらわれていた漱石であったからこそ激しく流入する近代に違和を感じることでできたともいえる。

漱石は決して庶民とは言えないが、この時期東京在住の勤労者の多くは借家に住んでいた。漱石は一九〇六年十二月西片の借家に転居す



1 《森鷗外・夏目漱石住宅》1887頃、建坪40坪

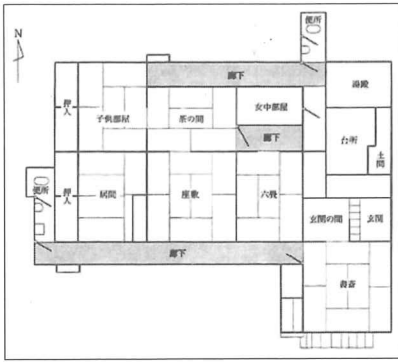


2 漱石山房（『書齋』創刊号、大正15年2月）



3 夏目漱石《書齋図》
（神奈川県立近代文学館蔵）

るが、この住まいが明治村に保存されている（図1）。漱石は四十歳にして四人の娘を抱え、後の長男純一が懐妊中であつた。一八八七年に建てられた西片の住宅は当時の一般的な住宅形式を反映していることは当時の模範設計図の住宅に近似していることから明らかである（図5、6）。この時期の住宅はそれぞれの部屋が密接した続き間式の間取りになっており、他の部屋に入るのに別の部屋に入らなければならない場合があつた。また、南側の廊下に面して客間が配置され、接客を主眼とした間取り配置になっていた。つま



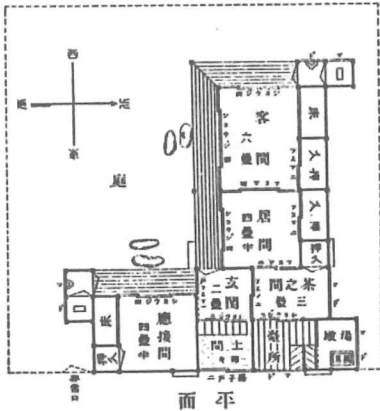
5 森鷗外・夏目漱石住宅平面図



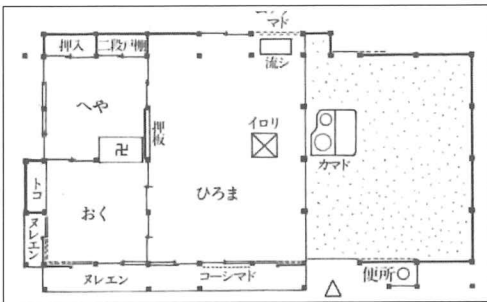
4 書斎の漱石 1914年(『新潮日本文学アルバム』2、新潮社、1983年)

り、そこに住む住民が快適に暮らすことを住まいの基本とは考えなかったのである。漱石は自宅では絨毯を敷いた床に座り毛筆で文章を書き、終生紫檀の文机をこよなく愛用した(図4)。漱石の日常生活の振

舞、生活意識が近世的な世界に根差していたことは明らかである。一九〇七年に移った家も家賃三十五円の借家で、三百五十坪の敷地に五部屋ある家で、このうちベランダに面した十畳二間を書斎とし、これが後に漱石山房と呼ばれる(図2、3)。庭には彼が好んだ芭蕉が植えられた(松岡譲『漱石・人とその文学』潮文閣、昭和十七年)。ちなみにこの建物の書斎部分は漱石没後保



6 「中以下の官吏又は会社員等の所謂勤め人向きの住宅」(金子清吉『日本住宅建築図案百種』建築書院、1913年)



8 北村家 1687年(日本民家園)図の「おく」が座敷

いた。近代に入り家父長制家族の成立とともに、床の間が出席者の身分ヒエラルキーを示す装置として機能するようになる。また、居間では囲炉裏周りの着座の位置が家父長を中心とする家族間の身分秩序を明示するようになる。これらを備えた間取り構成(図8)が近世農村の有力者宅に一般的となり、西片の貸家はそうした枠組みを都市に

存されたが、一九四五年五月の空襲で焼失した。近世の農村では庄屋が支配者たる武士を迎えるときに、格式を表わすための床の間、違い棚という書院形式を備えた座敷が必要だった。(図7)東アジアにおいて、日本は他の諸国と異なり十二世紀以降七百年にわたって武士が支配階層であった。書院はその武士の文化的嗜好が生み出した形式であり、近代になっても相変わらず武士が支配層であったから、その嗜好と形式がなお維持されたのであった。座敷は維新後に婚



7 久隅守景《四季耕作図屏風》石川県立美術館蔵(左隻部分)江戸期の農村における武士の巡検の様子を描いた作例は極めて珍しい。

おける利用形態に準用して生まれたものだと考えられる。

* * *

* * *

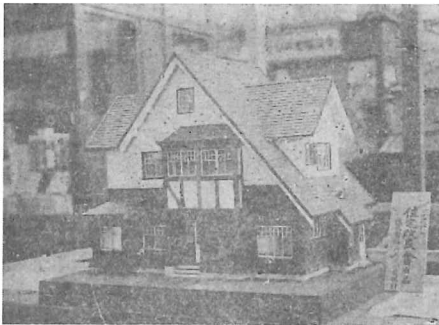
* * *

明治末から住様式への疑問は日本人の間からも生まれ始め、一八九一年伊藤為吉が濃尾震災に学んで『日本建築構造改良法』を発表したのを先駆として、新聞記者でバンクーバー滞在経験のあった土屋元作が一八九九年『家屋改良談』（時事新報社）を発表し、極めて具体的に「虚飾を軽んじ実用を貴ぶ」「跪坐を變じて踞座」「衛生と経済とに注意」「各室の間に判然たる區別」など伝統的な家屋からの脱却を提言していた。一九一六年橋口信吉は『住宅』を創刊し、住宅改良会を設立し、二〇年には森本厚吉が文化生活研究会を開設した。二人ともアメリカ留学体験があり、設計事務所（一九〇九年、あめりかや）運営、アパートメント建設（一九二五年）運営に挑んでいた。二〇年六月の『中央美術』は住宅研究号として、「住宅に美術味を加ふる事に冷淡な向きが多い」と指摘し、「美術的たれとは多額の工費を投じて美々しく飾り立てよと云ふのではない。要は考案と創意にある。」と主張した。伊藤忠太、田村剛をはじめとする十名の専門家による客間、書齋、寢室、庭園などについての寄稿のほかに、画家小説家四十九名の「日本住宅の改良したき点」が収録されている。

日本人の住まい方の従来の方式に変更を加えようとする動きは一九一〇年代に具体化するが、これもまた上からの改革運動であった。一八九五年フランス人キリスト教牧師シャルル・ワグネルの著した『La Vie Simple』が一九〇一年英訳されると、T・ルーズベルト大統領が推奨しアメリカで広く読まれた。ワグネルは「華美を競はんとする熱情と戦ひ、欲望を満すを以て人世生活の目的とするを止め謹厳質素な

る風を修め眞の生活に帰らば吾人は家庭の一致の為に力を盡すを得るは争う可からざる事実なりとす。然る時は家庭は別種の精神を呼吸し一層児女の教育に適當なる新習慣と空気を生ず可し。」と主張した。滞米中の中村嘉寿がこの翻訳権を得て、一九〇五年に『單純生活』（中庸堂書店）を刊行した。〇七年文部大臣がこれを高く評価したことをうけて、別に文部省が翻訳し一九一三年公刊された。

この時期文部省は教育制度の充実を図り、一九〇七年三月義務教育年限を四年から六年に延長し、同年古河家から百万円の寄付金を受けて札幌農学校の農科大学への昇格、東北帝大、秋田鉾山学校、上田蚕糸学校ほか六校を新設して専門教育を拡充した（牧野伸顕『回顧録』中公文庫、昭和五十一年）。一九一七—一九一九年に臨時教育會議を催し、このなかに「通俗教育ニ関シ改善ヲ施スヘキモノ」が答申された。この通俗教育担当専門官に一九二〇年五月に任命されたのが乗杉嘉寿（一八七八—一九四七）であった。乗杉は一九〇四年東京帝大文科大學哲学科を卒業し、文部省に勤務後一九一七—一八年アメリカ、ヨーロッパを視察し、一九年六月普通学務局第四課（二三年に社会教育課と改称）の初代課長に就任していた。第四課は一九一九年十一月—二〇年二月に東京教育博物館（館長棚橋源太郎）で生活改善展を開催した。展覧会開催趣旨は「本邦の家庭生活に於ける生活法が頗る繁雜不合理を極め



9 改良住宅模型（『生活改善』第1号、大正10年4月）



10 生活改善同盟会幹事会（前列中央伊藤会長、その後ろ眼鏡の人物が乗杉）

欧米の真摯簡便なるに若かざる事は何人も認むる處」と謳い、「国民の生活法を根本的に改善して無駄を省き能率を進め以て国運の発展に貢献する事」（『東京教育博物館一覽』大正九年）を急務とした。生活改善に関する参考品（図9）を陳列して民衆の啓蒙を図ろうとしたところ、入場者は十万人を超えた。その後、大阪、名古屋ほか九市で巡回開催された。二〇年一月二十六日から社会教育関係者に向け女子高等師範学校において一週間生活改善講習会も主催した。乗杉は衣食住の改善に取り組みたかったが、予算を獲得することができず同志を募って三ヶ年程度の資金を得たことで実現できたと言っている（磯野さとみ『理想と現実の間に 生活改善同盟会の活動』昭和女子大学近代文化研究所、二〇一〇年）。一九二二年創刊の機関誌には、三井八郎右衛門、岩崎小弥太から五千円、古河虎之助から三千円、渋沢栄一ら四名から二千円、早川千吉郎ら十二名から千円の寄付があったことが報告されている。

一九一九年十二月に乗杉と棚橋は連名で関係者に生活改善同盟会（以下、同盟会）結成を呼び掛ける書状を発送したところ、二十三日教育博物館に十八名（官吏六、教員八、その他四）が集まり、二十五日二十七日によって設立発起人会が開かれた。翌年に亘って会員勧誘が展開され、一月二十五日東京女子高等師範学校講堂に千人が集まり発

会式が開かれた（図10）。会長に公爵伊藤博邦（一八七〇—一九三二）が選出され、原敬首相、床波竹次郎内相、中橋徳五郎文相から祝辞が寄せられた。一九二〇年の賛助員は三十七名、二三年には賛助員一三四名、維持会員は三三二名となった。後者の賛助員は五十円以上を寄付することになっていた。加えて文部省からも毎年補助金を受けていた。一九二〇年香川、翌年室蘭、石川、松本などに支部が設立され、三〇年までに二十の支部設立が確認されている。二〇年十二月に制定された規約では、会の目的を「会員相互ノ協力ニ依リテ我國民生活ノ改善向上ヲ期スルニアリ」と規定した。官僚が主導して、有識者による生活様式の改革運動が広がっていった。二一年から機関誌『生活改善』（二五年『生活』と改題）が発行された。第一号（大正十年四月）に掲げられた規約では同会会員が実行すべき着手事項は次の通りであった。

- 一、時間ヲ正確ニ守ルコト
 - 一、訪問、紹介、依頼等ハ相互ノ迷惑ニナラサル様心掛クルコト
 - 一、近親者ニ対スル外停車場ノ送迎ヲ廃スルコト
 - 一、年玉、中元、歳暮、クリスマスプレゼント、餞別、手土産、祝儀不祝儀等ニ於クル虚飾ニ亘ル贈答ヲ廃止スルコト
- 驚くほど卑近で容易な目標である。しかし、次に掲げる改善事項調査委員会が一九二〇年から開設され、これらが実行しようとした目標はかなり抜本的に旧来の生活習慣を変えようとするものだった。
- 社交儀礼（委員長矢作栄蔵、副委員長三輪田元道）
 - 服装（委員長横手千代之助、副委員長長宮田侑）
 - 住宅（委員長佐野利器、副委員長田辺淳吉）
 - 食事（委員長横手千代之助）

一九二四年に遅れて農村生活改善調査委員会が設けられた。ここでの検討内容は同盟会から次のように冊子として公にされ、この後の日本人の生活に一定の方向性を与えることになった。

- 一九二〇年八月『住宅改善の方針』・『服装改善の方針』
- 一九二二年一月『社交儀礼に関する改善事項』、七月『住宅の間取及設備の改善』

一九二四年二月『生活改善の栞』、四月『住宅家具の改善』

一九二八年五月『新しい台所と台所道具』、十月『診て貰ふまで』

一九二九年十二月『実生活の建直し』（宝文館）

このうちでも最も影響が大きかったのが住宅改善への提言であった。なぜなら、まず「住宅は漸次椅子式に改めること」を原則とし、従来の座式を廃し、西洋式に改めようという抜本的な生活様式の変更を原則としたからである。その理由は座式が「仕事の能率を減殺し」、「衛生の上から見ましても不利」なことに対して、椅子式は「今日世界通用の生活法」であると指摘している。また、国民の習慣や生活様式は「決して固定的のものでない」（『生活改善』第二号、大正十年）から改めることができる」と主張し、西洋の規範に合わせてよいとした。また、台所も立式に変えようとしたのだが、近世までの調理法は座式が主流であり、確かに衛生的とは言えない現状であった（図11）。

さらに「住宅の間取設備は、在来の接客本位を家族本位に改めること。住宅の構造及び設備は虚飾を避け、衛生及防災等実用に重きを置くこと。庭園は近來の鑑賞本位に偏せず、保険防災等の実用に重きを置くこと。」を実行するように求めた。維新後の生活様式が近世から引き継いでいた室内装置を退け、生活法をも大きく変えようとしたので

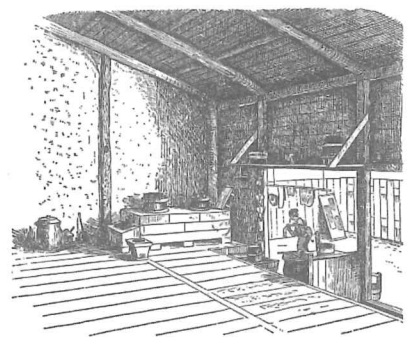
ある。冊子に掲げられた間取り（図12）は後に中廊下式と呼ばれるもので、中央の廊下で家族用の食堂・居間と来客用の書斎・客間とがそれぞれ独立して繋がるよう配置されている。これによつて家族は来客に気兼ねせずに生活ができるように配慮されている。また住宅の形式として、「大都市では、地域の状況に依り、共同住宅（アパートメント）並に田園都市の施設を奨励すること。」を方針とした。

一九二二年八月同盟会は文部省から財団法人の認可を得て、十月財団法人寄付行為を定めた。ここでは「本会は社会民衆を教育し国民生活の改善向上を期するを以て目的とす。」とされ、最初の規約が会員の自主的活動に期待するところに比重がかかっていたのに対し、より広く啓蒙活動によつて国民の意識を変えようとする方向に転換している。これは乗杉の文部省の活動として社会教育に取り組みべきだとの信念を反映しているように思われる。

そして、一九二三年に関東大震災が起こるのだが、これを予感した



12 建築設計の実例（『住宅家具の改善』所収）



11 モース《都市の家屋の台所》（『日本人の住まい』八坂書房、1991年）組板は竈に立てかけてあり、座式と思われる。

かのように前年に東京と大阪で新しい住宅の理想像を具体的に提示しようとした二つの試みが実現した。

・平和記念東京博覧会文化村

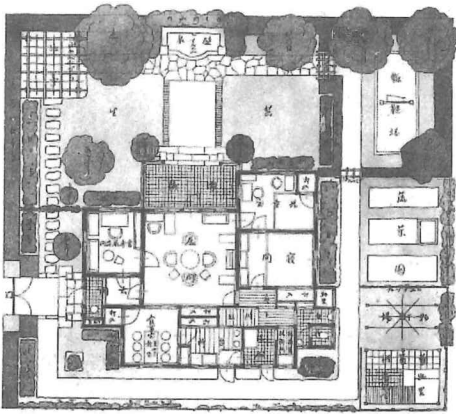
第一次世界大戦終結を契機とする博覧会の計画を知った建築学会は準備委員会（田辺淳吉委員長、久野節幹事）を設け、住宅の改善を図るための建築館を設けることを提案し、出品要綱を作成した。建坪二十坪程度、建築は坪単価二百円以下とし、居間、客間、食堂は椅子式を指定した。これに基づいて会場内に十四棟が会場奥の美術学校前にとめて建設され、文化村と名付けられ、一九二二年三月から九月まで公開され、一日千人以上の来場があったという。要綱では「現時我国二重生活の弊に鑑みるに我住宅の問題は欧米諸国のものに比し更に一段の重要なものあるを覚ゆ」（『文化村住宅設計図説』鈴木書店、大正十



13 生活改善同盟会出品住宅



14 同 居間・書斎



15 生活改善同盟会出品住宅 庭園配置図
 (43-15『文化村の簡易住宅』洪洋社、大正11年)

一年」と指摘し、公的生活での洋風の普及と家庭における和風の二重生活を解消することが大きな動機に挙げられている。

同盟会の出品住宅（図13、14）を見ると、庭側にガラス窓が多く開かれ、居間にはコルクの床に籐椅子応接セットが配置され、ガスストーブが置かれている。庭は博覧会場では未設置だが、図面（図15）では芝生が広く取られ、居間に面してパーゴラが設置されている。児童室と並んで南側に配置されていて、この時期重要視された日光浴に配慮した間取りである。庭が観賞用ではなく、家族の健康維持に貢献することを趣旨としていることが分かる。この博覧会にあまりかやも出品しているが、こうした住宅が都市居住者向けに普及する先駆けになったことは間違いないだろう。しかし、博覧会終了後真っ先に譲渡先が見つかったのは続き間式畳敷きの東京木材商同業組合のメートル法による出品住宅であり、建築雑誌では「せせこましい。我々の経済生活とはまだ距離がある。」などと評判は芳しくなかった。

・住宅改造博覧会

この博覧会は日本建築協会（会長片岡安）が企画し、同年十月から十一月まで箕面村桜ヶ丘で開催された。既に北大阪では箕面有馬電鉄によって一九一〇年池田室町住宅地の分譲が行われ、関東よ



16 本館での展示 (建築模型)

り郊外の宅地開発で先んじていた。日本建築協会は一九〇五年大阪に辰野片岡建築事務所を開設した片岡安(一八七六一一九四六)が中心となつて、一七年関西の建築家を中心にして組織されたもので、二一年二月には住宅改造展覧会準備委員会を組織した。同協会の博覧会趣旨説明は次のようなものであつた。

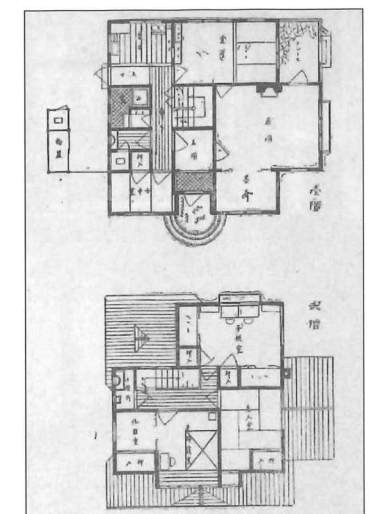
抑モ我国住宅改善施設ニ就

テハ、二重生活ノ苦痛ヲ脱却セム為、近年一般社会ノ輿論漸ク勃興シ来リ生活改善ノ運動ト共ニ真摯ナル研究ニ入りツ、アリ、従ツテ住宅改善ノ問題ハ最早論議ノ時期ニ非スシテ実行実現ノ時代ナルコト既ニ識者ノ唱導スル處タリ、本協会ハ茲ニ觀ル處アリ前後三回ノ懸賞募集ヲ断行シ、其ノ優秀案ヲ参考トシテ改良住宅ノ成案ヲ実現シ、一般公衆ノ觀覽ニ供ヘ且我建築界ノ現状ヲ紹介シ、以テ将来ノ向上促進ニ寄与セン(『建築と社会』第五輯第九号、句点は筆者)

この博覧会が同盟会の活動を参照し、その指針に沿つた住宅を実現しようとしていたことが明言されている。会場本館には建築の歴史、各種住宅模型(図16)、建築材料などが展示され、五千坪の敷地に実物出品住宅が建設された。

一九二二年三回のコンペを開催したが、そのおもな要件は家族六名、

二階建、敷地百坪、延床三十五乃至四十坪以内、建設費約六千円であつた。文化村より少し規模が大きく、



17 早良俊夫『日本建築協会出品住宅第三号』平面図、1922年『建築写真類聚』改進住宅卷一、洪洋社、大正12年

現実的な条件と言へる。会場にはこのコンペ案八戸のほか竹中工務店ほか八社の建設会社による十二戸、片岡建築事務所ほか設計者・関係者の五戸の計二十五戸が建てられた。(『建築と社会』(同前)コンペ二等当選案(図17)を見ると、家族の寝室など私空間はすべて二階にまとめられ、一階は南側に居間、食堂、書齋、北側に台所、女中室が配置されている。二階は老人室のみ畳敷き、一階は書齋はリノリウムで他は板張り、居間には暖炉が備えられていた。

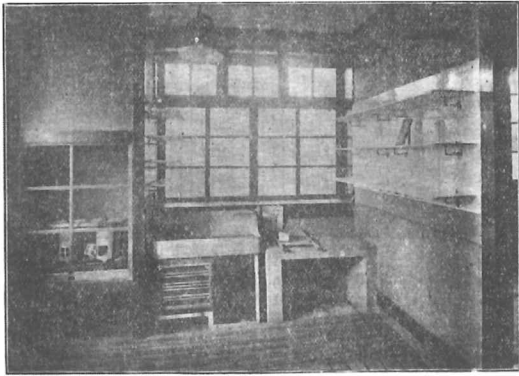


18 同居間 (図17に同じ)

出品住宅へは家具(図18)は高島屋、大丸、三越各家具部、旭家具など専門業者が納入し、暖房器具は作山鉄工所、阪急電鉄電気ストーブ



19 出品実物住宅B街



20 出品住宅台所

などが設置した。また、この出品住宅には植栽や造園も施工され(図19)、台所は立式(図20)に設計されていた。文化村よりもより現実的な提案が実現されたようだ。博覧会には大分セメント・竹内金庫店から各千円の寄付があつたほか企業、個人から寄付金が寄せられ、累計十二万四千円に達していた。

一九二二年七月には森口多里、林いと子の編集によって『文化的住宅の研究』(図21)が発行された。森口は美術批評で知られていたが、住家は建築家といふ一の専門家のためのものではなくして、其れを使用する「人間」乃至「家族」のために存在するものであることは言ふを俟たない。従つて人間の生の営みをコンフォータブルなものにするための一つの極めて重要な条件として、人間の生活意欲

の中心と進転とを観察し、そして私共の現在の住家をいかに取扱ひ、如何に導くべきかを考へる。

と同盟会と同趣旨の方向を求めた。本書では各部屋、家具、化粧、庭園について議論が展開され、人々に住宅の現状への問い直しが広く共有されていたことが示されている。震災前夜に日本人に生活の営み方への問題意識が広がり、日本独自の様相を帯びて展開されようとしていた。永瀬の描いた踊る裸婦像は生命主義的な性向を暗示しているのである。



21 永瀬義郎装幀『文化的住宅の研究』(アルス、大正11年)

一寸

第一〇四号 二〇二六年三月

『風俗画報』探索・その二

(明治二十四年～二十六年)

—富岡永洗・吾妻健三郎・寺崎広業・
はめ絵・尾形月耕・柳源吉・村井聰泉—

第一〇四号目次

岩切信一郎

『風俗画報』探索・その二

(明治二十四年～二十六年)

—富岡永洗・吾妻健三郎・寺崎広業・

はめ絵・尾形月耕・柳源吉・村井聰泉—

岩切信一郎 1

時に抗いし者たち——私の小菩薩峠(58)

大谷 芳久 12

—日中戦時下の文化人たち(一一)—

大正・昭和戦前期中等学校の図画教員33

金子 一夫 44

大阪府(三)

かうぐわんかう

丹尾 安典 61

春燈齋系の銅版画帖から

森 登 70

銅・石版画遺聞101

日本近代の室内はどう整えられたか(一一)

森 仁史 78

—田園都市、漱石の住まい、生活改善同盟会

寒明けにひと風呂浴びて手帖見る

偶然というのがあるものだ。銭湯からの帰り道で浮かんだ句を、家で一息ついて戯れにAIに示してみたら、「厳しい寒さを乗り越えた安堵とこれから来る春への前向きな心持ちが感じられる」と評してくれて気分を良くした。だがその先を読んでいくと、この句は成瀬桜桃子(一九二五～二〇〇四)の句であった。ことしの年末年始は右膝間接のリウマチでその痛さに呻吟する日々であったし、その後のリハビリで何とか杖を突きながらも歩けるようになり三月を迎えた。だから、本心からの安堵感を即興にしたものだった。桜桃子は私には父世代の俳人に当る。『春燈』創刊の一人で久保田万太郎、安住敦に師事したとか。「なあんだあ」とがっかりした思いより、偶然にも一字一句同じという奇妙さもあり、また、同じような心持ちで言葉を共有する友を得たようである、ありがたく思えた。

『一寸』第九十九号(二〇二四年十二月)に、『風俗画報』初期の印刷と画家」と題して書いた。『風俗画報』の創刊号から第二十四号までに ついてコメントしたものであった。『風俗画報』を集めるのを楽しみに